

2014年(平成26年)
10月10日
No.353
毎月2回10日/25日発行

リサイクル通信

The Reuse Business Journal

発行所: (株)リフォーム産業新聞社
本社: 〒104-0061
東京都中央区銀座8-11-1
TEL:03(6252)3451 FAX:03(6252)3461
発行人: 加賀光次郎

リフォーム産業新聞社は
チャレンジ25キャンペーンに
参加しています



家具修理の未経験者あえて採用

～家具修理職人育成～ アンティーク山本商店

シリーズ

人財育成



アンティーク山本商店。家具の修理は売り場の隣にある作業場で行っている。修理風景を開放し、お客に商品の安全性をアピールしている

「『のぎりはどう挽いたらいいんですか？』と聞くと、木工のことを知らない人の方がいいですね」そう話すのはアンティーク山本商店の三代目の山本明弘さんだ。同店では、他店での家具修理の経験者は採用しない。美大の卒業生や木工道具の使い方を知っている程度まではOKだが、他店で修理の経験のある人材は採用しない。その理由は「山本商店色に染めたから」だ。同店が修理で大切にしているのは「その家

明治期から昭和30年代までの和家具や雑貨の販売をしているアンティーク山本商店(東京都世田谷区)。和家具の持つ味わいを残しつつも、引き出しが指一本で動く状態まで徹底的に補修している店だ。しかも、修理職人を採用する際の基準は「全くの未経験であること」。なぜ素人を採用するのか。その理由を取材した。

「その家来、同店では経験者のみで、未経験者も採用してはならない。美大の卒業生や木工道具の使い方を知っている程度まではOKだが、他店で修理の経験のある人材は採用しない。その理由は「山本商店色に染めたから」だ。同店が修理で大切にしているのは「その家

「真つ白な状態で入った人が『後伸び』をしますね。経験が却って自由な発想を妨げてしまうのか、うちの修理方法しか知らない人の方が、これまでにない良い方法を編み出しています」と山本さんは話す。

採用を見合わせている。山本明弘代表取締役



山本明弘代表取締役

新人が最初に練習するのは「刷毛塗り」。同店では汚れ落としをした後、修理箇所があれば直し、最後にニスの刷毛塗り仕上げを行う。このニス塗りには刷毛目が残りやすく、きれいに仕上げるにはコ

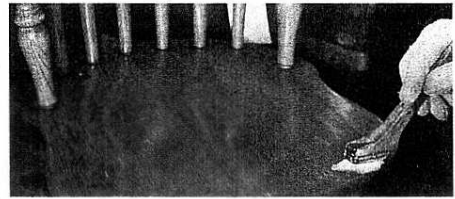
「正直いって男性スタッフの修理事はキツイです。外で修理をするので暑さ寒さもありますし、汚れますし、力仕事でもあります。それでも続けてくれているのは、家具が好きで、家具に携わる仕事がないという想いがあるから。探究心を持って家具に向き合ってくれているからだ」と山本さんは話す。

ツが必要。新人は練習も兼ねてニス塗りを何回も行うが、うまくいかない時は先輩が塗り直す。こうした研修期間を経て、飲み込みの早い人で3カ月、遅くても6カ月あれば一人で修理作業ができるようになる。

「町古道具屋から脱却するために」実はスタッフを雇用するようになったのは山本さんが三代目を継いだ20年ほど前から。それまでは家族経営の「町の古道具屋」だったと言つ。うす暗くほこりっぽい店内。商品には値札がなく、その日の気分次第で値段を決める。その状況から脱却するために、会社組織にし、スタッフを入れ、人を育てる必要性を強く感じた山本さんは話す。

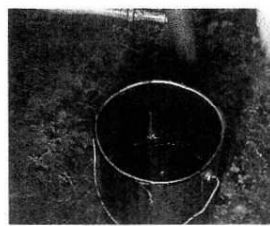
今、目指しているのは「社長がいなくてもお客様から信頼され、売上げを伸ばしていける強い会社づくり」だ。「最終的に私が責任を持つので、スタッフには思い切って仕事を任せてほしいと思っています」と山本さん。スタッフの意見もよく

探究心を持って家具に向き合う。現在、家具の修理を行う男性スタッフは8名。販売などを行う女性スタッフは3名。男性スタッフは家具の修理はもちろん、配達・店内ディスプレイ、地方発送の商品梱包、個人宅からの買受けなどなんでもできる「オールラウンダー」が揃っている。一番社歴の長いスタッフは20年と、長期間勤務するスタッフもいる。



↑新人職人がまず練習する「ニスの刷毛塗り」。同店では仕上げにオイルステインという塗料をタオルで塗って乾かした後、シンナーで割ったニス(左写真)を刷毛で塗って仕上げる。そうすることで、自然な仕上がりをつくることができる

会社概要
アンティーク山本商店(東京都世田谷区)
設立/1945年
代表者/山本明弘
事業内容/アンティーク和家具および雑貨の販売、買取。
備考/戦前、特別高等警察の職に就いた祖父が戦後、古物商に転身。店舗の運営をしながら北沢市場の会主も務める(北沢市場は平成9年に閉会)。その後、父親の代になり、取り扱った和家具を和家具に特化した店に。現在の山本明弘さんが三代目になる。



採用している。8月まで実施していた被災者への家具の支援「生活再建応援プロジェクト」もスタッフのアイディアだった。来年70周年を迎える同店、100年続く店を目指している。